

## 04

## めのう細工

鉄分を酸化させ、赤く発色させる技術を駆使しています

めのうは、玉髓ぎよくずいという鉱物の一種で、色や透明度が異なる層が縞模様を形成しているのが特徴です。漢字では「瑪瑙」と書き、この言葉は原石の外観が馬の脳に似ていることに由来しています。若狭（現在の福井県南西部）では、奈良時代に、玉を信仰する鰐族わにぞくという渡来人が、当地で産出するめのうを用いて玉づくりを始めたとされています。これを発祥とすると伝えられる「若狭めのう細工」は、その後、江戸時代に「焼き入れ」という独特の技法が確立され、玉づくりにとどまらず、さまざまな工芸彫刻の技術が開発されてきました。

「焼き入れ」とは、めのうの原石を 200～300℃で焼くことによって、原石に含まれる鉄分などの酸化反応（物質が酸素と化合すること）によって赤く発色させる方法です。焼き入れを行う前のめのうは、薄いねずみ色などをしています。初めに原石を太陽などの自然光にさらし、自然に内部まで酸化させます。その後、灰の中に入れて、その上から炭を起こして焼くという作業を何度も繰り返し行うことによって、透

き通るように赤く発色するのです。熱しすぎると石が割れてしまい、逆に温度が低すぎると透明感が出なくなる難しい作業といわれています。現在は、電気窯を使って約 300℃の温度で数日かけて焼き入れを行うことが多くなりました。

焼き入れをした石は、ダイヤモンドカッターなどを使って大まかに切削します。その後、鉱物を粉末にしたものおよび水をかけながら、高速回転する円盤で研磨していきます。めのうは鉱物の中でも硬い方で、加工が難しいのですが、それを丹念に削って磨き上げることによって、つやのある透明感となめらかな手触りを持つ美しい作品ができあがるのです。（平成 22 年 7 月）



協力：若狭工房（小浜市役所商工振興課内）